

論文 / 著書情報
Article / Book Information

論題	『西部放浪記』に読むトウェインの南北戦争——F. スコット・フィッツジェラルドとの比較の中で
著者	上西哲雄
出典	マーク・トウェイン 研究と批評, , No. 13, pp. 35-41
発行日	2014, 4

特集・マーク・トウエインと戦争（シンポジウム）

『西部放浪記』に読むトウエインの南北戦争・F・スコット・フィッツジェラルドとの比較の中で

上西哲雄 UENISHI Tetsuo

0 ■はじめに

マーク・トウエインの二作目の著作『西部放浪記』(Roughing It 一八七二)は、一八六一年七月から一八六六年暮れまでの西部での体験を記した旅行記の体裁をとっており、一八六一年四月に開戦し一八六五年四月に事実上の終戦を迎えた南北戦争とは重なる。トウエイン本人もごく短期間で非正規兵であったとは言うものの戦闘に参加しているが、この作品の中で南北戦争に触れることは殆どない。

本作品は、第一作目の『地中海遊覧記』(The Innocents Abroad 一八六九)が予想を超えた成功を博したことを受けて書いた柳の下の旅行記であったため、旅行先の見聞に集中したとも考えられるが、時代設定が明確に示され、ごくわずかとはいえ南北戦争に関係するエピソードもちりばめられているため、出版当時の読者なら南北戦争が物語と同時並行して進行していることを意識したのは間違いないまい。トウエインは南北戦争を、示唆しつつむしろ語らないことで何か言いたいことがあったのではないか——本稿が目指すのは、このことを解明することである。

しかしながら、南北戦争に関連する記述がここまで少ない

作品を単独で読み、そこに作者の戦争に対する思いを読み取るのは、こじつけのそしりをまぬかれまい。先行研究においても、ごく限られた南北戦争に関連する事象の背景を説明するものはあっても、作者の戦争観といった観点から本作品を扱う例はない。³

本稿では、トウエインが南北戦争における自らの体験について言及した著述としてしばしば参照されるエッセイ「失敗した作戦の個人的ないきよめ」(“A Private History of the Campaign that Failed” 一八八五、以下「個人的ないきよめ」)にトウエインの戦争に対する思いを読み取り、それを『西部放浪記』に当てはめることで、本作品における南北戦争に対する彼の思いを浮かび上がらせることを試みる。

その当てはめ方については、トウエインと同じく中途半端な形で戦争に関わったF・スコット・フィッツジェラルドの場合を参照したい。フィッツジェラルドは第一次世界大戦によって社会が大きく変わったと言われる一九二〇年代に、その戦争に参加した世代を代表する小説家として一世を風靡したにもかかわらず、アーネスト・ヘミングウェイやジョン・ドス・パソスのようにヨーロッパ戦線への参加の経験もなけ

れば、戦争と時期の重なる物語においても戦争そのものについて触れることは始まらない。伝記的に戦争を強く意識する立場にいながら、そのことに本格的に取り組むチャンスがあった作品で殆ど触れなかった二人を並列することで、さらに見通しをよくしようというわけである。

1 ■ トウエインの南北戦争体験とその記述

トウエインの南北戦争の体験は、一八六一年六月、故郷ミズーリ州各地に自発的に結成された民間の遊撃部隊に、友人の誘いに乗って参加したものの、たった二週間で離脱したというものである。トウエインが部隊に参加したのが一八六一年六月のこと、翌月には兄オリオンが連邦政府からネヴァダ準州の州務長官に任命されて一緒に旅立っているのだが、ネヴァダ準州の州都カーソン・シティに向かう旅で始まる『西部放浪記』の冒頭には南北戦争のことも部隊のことも触れられてはいない。旅の動機は、知らない世界に行く興奮で満ちている。

「個人的ないきさつ」に書かれた、部隊を離脱するいきさつは、面白おかしくつづられる戦争体験から突然トウエインの持ち味であるユーモアが鳴りをひそめた語りへと変化する。徐々に迫り来る見えない敵に対する恐怖が重なって押しつぶされそうになり、たまたま目の前に現れた人影に向かって確認もせずに一斉に射撃する。殺害した相手が、丸腰の民間人であることを後で知り、「……戦争はみんな、個人的には敵意など持っていない見知らぬ人を殺すことでしかない」

(“Private History” Kindle e-book file) と看破して部隊を去ることになった⁴。

戦争は要するに人を殺すことだという思いを胸に向かった西部には、「赤の他人を殺すこと」に満ちた世界が待っていた。『西部放浪記』が織り成す西部の世界は、なによりもまず様々な種類の銃に満ちた世界であり(二章、四章)、殺人鬼が何食わぬ顔で駅馬車会社社員として雇われ尊敬され(一〇章、一一章)、州都カーソン・シティでも、銀鉱熱に沸くヴァージニア・シティでも殺人は珍しくない(二二章、四八章、四九章)ことが紹介される。西部で殺人は珍しくなく、「個人的ないきさつ」で示される「戦争は赤の他人を殺すこと」というトウエインの思いをここに当てはめると、西部では戦争が日常化しているということになる。そうなると、西部はまるで戦時下にあるほど非日常的となり、翻って東部が戦争状態にあるのは西部のように異常であるということになる。しかしながら、この論理を煎じ詰めると、戦争は異常な状況であるという、みもふたもない結論に回収することになる。「個人的ないきさつ」を当てはめるにしても、『西部放浪記』の戦争観に切り込むのに、より鋭い角度はないものか。

2 ■ フィッツジェラルドの第一次世界大戦体験とその記述

フィッツジェラルドはアメリカが参戦した一九一七年一月に入隊し、いくつかの基地を移動した後の一九一八年一月一日、ヨーロッパ戦線に派遣されるべく待機していたニューヨーク州ロングアイランドの基地で休戦を迎える。いず

れも発表とはほぼ同時期を舞台としているフィッツジェラルドの長編小説四作のうち、第一次世界大戦と物語が重なるのは最初の二作、『楽園のこちら側』(This Side of Paradise 一九二〇)と『美しく呪われし者』(The Beautiful and Damned 一九二二)である。しかしいずれも戦争に直接触れることはない。一作目の『楽園のこちら側』では、二部構成の第一部と第二部の間に挟まれたインタールードに、戦争の時期であることが明記されるものの、盛り込まれるのは主人公が指導者と仰いできた神父が主人公に書き送った手紙だけである。一方の『美しく呪われし者』では、戦争中に主人公が兵士として駐留する国内の基地での暮らしが一章を設けて描かれるが、訓練の様子に触れることはなく、同僚の兵士たちと現地の女性たちとの恋の鞘当て、そこに主人公の新妻が訪れて愁嘆場が繰り広げられるというエピソードが展開されるだけだ。フィッツジェラルドの戦争に対する思いについては、四作目の長編小説『夜はやさし』(Tender Is the Night 一九三四)に、核心を突くようなエピソードがある。第一卷二三章では、主人公たちが第一次世界大戦の激戦地として有名なソムムの戦いの跡を訪れ、そこに設けられた戦没者の墓地で、身内の墓を探す女性に出会う。アメリカ本国で戦争局に教えられた場所には墓が無いと嘆く女性に主人公が、どの墓でも良いのではないかと助言するものである(69)。戦争の前ではひとりひとりの具体的な個人に価値は無い、ととれるものである。

戦争と個人の関係については、フィッツジェラルドが『夜

はやさし』を執筆することに苦吟していた頃に発表した短編小説の中で、主人公に逆の立場をより明確に表明させている。『最後の南部美人』("The Last of the Belles" 一九一九)は、第一次世界大戦中に国内の基地で訓練を受けながらヨーロッパ戦線への派兵を待つ若者の生態を描くものである。その中で、主人公の同僚の兵士キャンビーが飛行機で急上昇してエンジンを持ち、自殺とも事故とも不明な墜落死を遂げるエピソードがある。その知らせを受けた主人公は次のように内省する。「僕はキャンビーを好きになったことはなかったが、無残で無意味な彼の死は、その日フランスで戦死した何千人よりも現実的だった」(Kindle ebook file)。何千の戦死者の死よりも、自分が知っているひとりの個人の死の方がはるかに重いというこの思いを、「どの墓でも一緒だろう」と言い放つ『夜はやさし』の主人公は、失ってしまった形になっている。

初期の長編二作に戦争が直接描かれないのには、戦争という大きなできごとに対して個人の生を遙かに重視するというフィッツジェラルドの立場が反映しているのではない。戦争によって登場した新しい世代の主人公は確かに戦争と強い関わりがあるものの、個々の人物の背後に広がる人生は、新聞で伝わるヨーロッパ戦線でもなければ、アメリカ政府の外交政策でもない。日々の欲望に翻弄され、愛に苦しみ、将来に悩む、ごくごく当たり前の個人の人生こそが「私の」戦争だという人は、ヨーロッパ戦線で倒れる兵士の数よりも圧倒的に多い。むしろひとりひとりの兵士が背後に抱える人生に

おいても、戦争と無関係の様々な物語が展開しているはずだ。ヨーロッパ戦線で戦ったギャツビーとニックにも、それぞれの背後に起伏にとんだ人生が広がっていたことが、『グレイト・ギャツビー』の物語をもたらしただけのことになっている。

3 ■ トウエインの個人主義

ひるがえってトウエインは「個人的ないきさつ」の中で、自分たちの無節操な射撃によって死んでいく男にも、背後に大きく広がる個人的な人生を抱えていることを、主人公に思いつらせる。「その男はまるでねばけているように、自分の妻子について口の中でもごもご呟いた。私は改めて暗い思いに陥った。私がやったことはこの男にとどまるのではなくその妻子にまで及ぶのだ。この男はもちろんのこと、それ以上に彼の家族が私に危害を加えたことなどないというのに」(Kindle ebook file)。男は死の淵で妻と子どもについて寢言のようにつぶやき、主人公は男を射殺してしまうことが男の死で終わらないこと、その背後につながる彼の妻や子ども的人生にまで連鎖していくことに思い至るのである。エッセイ冒頭で、参加するいきさつが語られた後に、参加者のひとりひとりに対しての個性やエピソードが、面白おかしく語られる。妻と子どもについて意味不明な言葉を発する瀕死の男にも、語るべきエピソードがあったはずだ。このエッセイは、南軍北軍の区別無く参加した人に語ってもらうことによって、南北戦争の真実に迫ろうという雑誌の企画にに応じて書かれたものであるのだが、トウエインにとって戦争の真実とは、戦況

や作戦とは関係の無い方向に大きく広がる人生を抱えた、具体的な個人の真実であつたのではないか。では、トウエイン個人にとって、南北戦争の真実とは何か。

その答えが『西部放浪記』であつたのではないだろうか。同書に描かれるのは、東海岸からはるか西の、ミズーリ人にとっても驚異の世界だ。自然の驚異ということ言えば、夏の雪景色(二二章)、砂漠を通過する経験(二八章)、タホ湖の美しさ(三二、三三章)、モノ湖のアルカリ水(三八、三九章)が紹介される。珍しい制度や習慣と言えば、執筆時にはなくなっている駅馬車の旅(二、三、四、六章)やポニー・エクスプレス(八章)、新しく出来た準州政府(二五章)や裁判(三四章)、そして何よりもシルバー・ラッシュ(二六、二七、二八、二九、三〇、三五、三六、三七、三八、四〇、四一、四六、五二章)。西部ならではの人々の気風もあつて、東部とは世界が違ふことをこれでもかと描き続ける。南北戦争との直接の関わりと言えば、二週間の遊撃部隊への参加と離脱だが、トウエインがその時の自らを振り返ると、むしろ自らの姿の背後にこうした風景が広がるのではないか。

しかし、一方で、語り手が個人的な戦いを繰り広げていたことも見逃すわけにはいかない。それは異文化との戦いである。たとえば当時、西部では東部に比べて物価は遥かに高いものだった。東から来た人間が辺境の地ソルト・レーク・シティの靴磨きの青年に間違つて小額のチップを出すと、変な顔をされるだけではなく、傲然とつき返されてしまい、居合わ

せた土地の人間によって嘲笑の嵐に包まれてしまう(一七章、156)。このようなことが起こるのは、この土地の人間が、自分たちとは違った価値観の人間を「よそ者(enigrant)」としてことさらに軽蔑するためだとし、これはソルト・レーク・シティの人だけの話ではなくてネヴァダでもカリフォルニアでもそうだとする(一七章、160)。ここには南部でも北部でもない新しい価値観で成り立つ世界が彼を待ちうけていて、その中で生き抜いていくことこそが、彼の個人的な戦いである。

このように、南部でも北部でもない世界の中では、南北戦争の争いは相対化される。たとえば、黒人に対して自由になったからと言ってえらいそうな口を叩くなどというような趣旨のことを言う人物は、単なる酔っ払いの下劣な人物に描かれ、(三三章)、一般人の寄付で支える合衆国衛生委員会の寄付も、趣旨を誰も理解することなく寄付のためのオークションに興奮して寄付に応じるだけだ(四五章)。西部にあつては南北戦争の大義など、酔った上での世迷言や、欲望のはけ口となる刺激の種でしかない。実際のネヴァダでのトウェインはと言えば、新聞記者として書いた記事の中で、明らかに南部寄りと思われるものが散見される。しかし本書では、南北戦争などとはどこ吹く風、それぞれの生活を欲望に従つてたくましく生きる開拓者たちの世界が展開されるのである。

物語の冒頭、語り手が西部に旅する経緯を述べる中で言うのは、知らない土地や知らない経験への憧れと、故郷でそれを語ることによつて英雄になれること、そして金持になれる

ことである(一章)。刺激、名声、富といった、欲望を満たしてくれる素材に満ちた世界への憧れというわけだ。このように憧れた地ネヴァダを去る際にも、語り手は「私はひとところに長い続けることにあきらめし始めた(中略)サンフランシスコを見たくなつた。いや、どこでもいいからどこかに行きたかつた」(五五章、306)と、さらなる変化を求めたことをその理由としてあげていて、欲望のはけ口を求めてこの地に来た動機と一貫している。ネヴァダを去る決心をした丁度この頃、東部ではゲティスバーグ、西部ではヴィックスバーグにおける北軍勝利(歴史的にはいずれも一八六三年七月初め)の情報が街に伝わったことが語られる。これらは南北戦争において戦況が北軍へと大きく傾く重要な戦いであったのだが、そのことには一切触れられることはなく、ましてや戦争についての解説は一切ない。語り手個人にとつては、南北戦争の雄雌の行方より、憧れのネヴァダを去る決断の方が、遙かに大きな意味があつたということだ。

4 ■ 結語

人間とその営みを具体的な個人という視点から見るという観点は、考えてみれば文学では当然のことであり、フィッツジェラルドにおいてもトウェインにおいても、戦争と同時期の社会を舞台とする物語を紡いでも、戦争が個人の生活の背景に退くのは当然のことである。フィッツジェラルドは戦争と時期の重なる設定の長編小説から取って戦争を省くことで、しかし戦争が背後に厳然と聳え立つことを示唆しながら、

ひとりの人物が戦争とは一見無関係なところで、個人的な苦悩を抱えながら生きていく様を描いた。これに対してトウエインも、戦争と時期を同じくする旅行記を執筆し、そこからこれも戦争への言及を極力控え、しかし戦争が同時に進行していることを切れ切れに示しながら、戦争がむき出しにした対立する価値観の、どちらともまったく次元の違う価値観で形成される社会の存在を示して見せた。

特にトウエインは、現実を記述するはずの旅行記の構成や選択を工夫することで、価値観の対立を巡って内戦を繰り広げるアメリカ合衆国とは位相の異なる世界をアメリカ合衆国は抱え込んでいること、その世界は東部の社会から見れば下品で粗雑かもしれないが、そうした東部の見方も含めて、価値観の対立を相対化する世界が存在することを提示した。北部による、「再建」という名の南部軍事支配体制と只中の一八七〇年代初期。ひとつの価値観が別の価値観に勝利したことに沸く合衆国社会にとって、第三の価値観の提示は大きな意義があったのではないか。

丁度この頃トウエインは東部に移り住み、北部における奴隸制反対運動を物心両面で支えたラングドン家の女婿となり、奴隸解放運動の指導的役割を果たしたビーチャー牧師一族と親しく付き合うなど、いわゆる北部文化の中に身を投じている。そんな中で、特定の価値観を絶対的な真実であると墨守することを否定する世界観を、南北戦争とその時期の白らの西部での暮らしに改めて発見し、それと格闘することによって南北価値観の葛藤を乗り越えようとする自らの姿を改めて発

見したのではないか。しかしながらその後のトウエインが、代表作と目されるような作品の中で、繰り返し南北戦争前の奴隸制度下の南部を舞台にする物語を次々と執筆するのは周知のことである。払拭しきれない南部文化を内に抱え、戦後の北部の知識人の中でどのように生きていけば良いのか。そのスタート地点で描いて見せた、北部でも南部でもない西部のビジョンは、最終的に後年の強い相対主義、懷疑主義につながる自己相対化の契機として、この時から心の襞の隙間に育まれ始めたのではないだろうか。

注

1 作品冒頭近くの大津横断鉄道への言及で物語の開始が、一八六〇年代始めであることを明示し(50)、最終章では西部滞在が七年間であったことを明記する(561)。

2 八章で言及されるボニー・ライダーはカリフォルニアの人々が南北戦争前後から開始直後の東部の政治状況を一刻も早く把握するために一八六〇年四月から一八六一年一月までの期間限定で行われた郵便業務。三章で言及される黒人の選挙権は南北戦争後の「再建(Reconstruction)」の環として取り組まれた憲法修正のひとつ。四五章に出てくるアメリカ合衆国衛生委員会は南北戦争開戦直後の一八六一年六月に連邦政府軍の傷病兵の治療を行うために結成された民間組織。最もはつきりと南北戦争に言及するのは第五章での、共に一八六三年七月に戦況を北軍勝利に大きく転回させた西部のヴィックスバーグの戦いと東部のゲティスバーグの戦いの報。

3 トウエインと戦争の関係を正面から扱った Fulton, Schmitz, Wachell (Ch. 10) ですら、『西部放浪記』に本論のような観点から取り組んだものはない。

4 多くの研究者がトウエインの戦争観の要点としてこの箇所注目する (Imerson 108, Powers 98-99, Wachell 136-38 など)。異なった見方として

は、シュニッツが「個人的なきざら」と同時に発表される『ハックルベリー・フィンの冒険』の物語の展開にトウェインの南北戦争に対するより屈折した思いを読み解き（Schmitz 84-89）、カプランのように戦争に参加する点に初めから気がすすまなかった（Kaplan 85）解釈もある。

5 フルテンは“Bilger vs. Tahoe”（*Virginia City Territorial Enterprise* September 4-5, 1863）“Unfortunate Blunder”（*The San Francisco Daily Morning Call*, September 3, 1863）といった新聞記事や手紙を挙げてトウェインの南部寄りの立場を示す。エマソン、バワーズらは、何よりも合衆国衛生委員会を「離婚を支えるための基金」などと口汚く揶揄した論説（*Virginia City Territorial Enterprise*, May 17, 1864）が、北部寄りのジャーナリストとの間で法闘争に発展するほど強烈な北部批判になっていた点に注目する。

引用文献

- Emerson, Everett. *Mark Twain: A Literary Life*. Philadelphia: U of Pennsylvania P., 2000.
- Fitzgerald, F. Scott. *The Beautiful and Damned*. 1922. New York: Cambridge U. P., 2007.
- . “The Last of the Belles.” 1929. *The Complete Works of F. Scott Fitzgerald*. Delphi Classics, 2012. Kindle ebook file.
- . *This Side of Paradise*. 1920. New York: Cambridge U. P., 1995.
- . *Tender Is the Night*. 1934. New York: Cambridge U. P., 2012.
- Fulton, Joe B. *The Reconstruction of Mark Twain: How a Confederate Bushwhacker Became the Lincoln of Our Literature*. Baton Rouge, La.: Louisiana State U. P., 2010. Kindle ebook file.
- Kaplan, Fred. *The Singular Mark Twain: A Biography*. New York: Anchor Book, 2003.
- Meredith, James H. “World War I.” *A Historical Guide to F. Scott Fitzgerald*. Ed. Kirk Cumrutt. New York: Oxford U. P., 2004. Pp. 163-213.
- Powers, Ron. *Mark Twain: A Life*. New York: Free Press, 2005.
- Schmitz, Neil. “Mark Twain’s Civil War: Humor’s Reconstruction Writing.” *The*

Cambridge Companion to Mark Twain. Ed. by Forrest G. Robinson. NY: Cambridge U. P., 1995. Pp. 74-92.

Stern, Milton R. “Tender Is the Night and American History.” *Cambridge Companion to F. Scott Fitzgerald*. Ed. by Ruth Prigozy. New York: Cambridge U. P., 2001. Pp. 95-117.

Twain, Mark. “A Private History of the Campaign that Failed.” 1885. *The Complete Works of Mark Twain*. Delphi Classics, 2012. Kindle ebook file.

———. *Roughing It*. 1972. New York: Oxford U. P., 1996.

Wachtell, Cynthia. *War No More: The Antislavery Impulse in American Literature 1861-1914*. Baton Rouge, La.: Louisiana State U. P., 2010.

（東京工業大学）

■第三版発売中！

古矢旬 遠藤泰生編

新版アメリカ学入門

アメリカの現状を多面的に理解するための基礎知識を気鋭の研究者が易しく解説。文献解題、用語集を付けた、社会人、学生に必携の入門書。

執筆者

古矢旬（序論・政治／遠藤泰生（歴史・用語集）／中本悟（経済）／小檜山ルイ（社会・文化）／中野勝郎（日米関係）／菅美弥・湯浅成大（用語集）

46判302ページ 定価（本体2400円＋税）

南雲堂